
明日にさようなら

オオハタ ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日にさようなら

【Nコード】

N1577K

【作者名】

オオハタ ユウキ

【あらすじ】

「こっぴつ霧囲気を書いて見たかったです。」

ウイスキーと氷の入ったグラスの表面に付いた水滴がテーブルの上へと流れていく。手に取ると水滴は指先に移動しひやりとした感触が手に広がった。一口だけそれを喉へ流し込む。もう何杯も飲んだためか、口腔には何の刺激も感じない。まるで麦茶を飲んでいようだな、と思ったが、茶色いウイスキーを見てみると、もしかすれば僕が気づいていないだけで、いつの間にか麦茶に変わっていたのかもしれない。

「どうせまたつまらない事でも考えているんでしょ？」

目を覚ましたのか起きていたのかわからないが、洋子の声がベッドから聞こえた。洋子はベッドから起き上がり、下着だけでは寒いのだろう、上着を羽織ながら僕の座る椅子へと近づいてきた。上半身には上着を羽織肌は見えないものの、下半身は下着以外何も身に付けていないので、ほそりとした太ももが目についた。それを何となく眺めながら、僕はまたウイスキーのようなものを煽った。

洋子と僕が知り合ったのはもう五年も前になる。その頃の僕の生活は、一言で言えば荒れ果てたスラム街に住むホームレスのようなものだった。様々な場所へ行き、そこで見た風景を絵にする。その移動だけでも金がかかり、飯と画材どちらを買おうか、などと悩む日々。当然絵なんて売れる事が無く、日払いのアルバイトをしていた。僕が何社目かに登録した日雇い業者の社長が、洋子だった。まだ出来たばかりの小さな会社で、従業員は洋子を合わせて数人しかいなかった。その為、社員が外へ出てしまうと洋子が面接や登録をしなければならなかった。今となっては理由は思い出せないが、僕は面接なのにも関わらず、画材を持ったまま会社へと言った。そして自分の絵を洋子に褒められ、そこから関係がスタートした。

自分が食べるのも精一杯だから、と友人以上の関係を拒んでいたが、「生活の面倒は私が見るから、あなたはただ絵を描いていなさ

い」と言われ、断る理由が無くなった僕は洋子と付き合うことになった。最初でさえ、女に面倒を見てもらう自分をふがいなく思っていたが、それも慣れてしまふと何とすることも無くなった。感謝の気持ちは未だにある、と信じたい。

このマンションも洋子の物だ。元々は寮にするつもりだったが、この近辺で中々取引先が見つからず、今では一般人にも開放していた。何人かは派遣社員も住んでいるようだが、僕はあまり知らない。洋子が話さないので、僕も聞かないのだ。

「この酒にも飽きてきたよ」とグラスを持ち上げながら言うと、洋子はそれを受け取り、一口だけ煽った。

「あら、結構高かったのよ？」

「そこが問題なんだよ。やっぱり僕には安酒が合ってる」
上っ面だけの関係。

「画材を買うのに金がかかるんだ。何か仕事は無いかな？」

仕事を紹介してもらおうなんて思っていない。これは単なる「金をくれ」というサインなのだ。洋子もそれはわかっている。テーブルの上に置いたままの財布から万札を二枚抜き、僕に差し出した。

「いつも悪いね。絵が売れてくれたらいいんだけど」

「出世払いでいいわよ」

売る絵なんて無い。僕はもう絵を描くのをやめていた。それも洋子はわかっている。そして洋子の会社が危ない事も知っている。このご時勢、登録する人間は大勢いるものの、その人間を斡旋する仕事が無いのだ。でも、金は貰う。

僕はその足で繁華街へと赴き、ボトルをキープしている安いスナックへと歩いて行った。と言ってもそこでは金を払うことはしない。売れない絵書きの僕を気に入ってくれたママが、ツケにしておいてくれるのだ。働いている女の質は良いとは言えないが、タダより高い物は無い。

途中コンビニで煙草とビールを買い、それを嗜みながら寒い夜の街を歩く。スナックに明かりはついていない。店を閉めたんだろう

か……。仕方なくマンションへと戻るが、ドアが閉まっている。

「これから、どうするかなあ……」

言った所で何か解決するわけではなく、僕のそんなため息は夜空へと吸い込まれるようにして消えて行った。そして僕はマンションから飛び降りた。

(後書き)

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1577k/>

明日にさようなら

2010年10月17日06時42分発行